

考 試 科 目	日文小論文	所 別	日本語文学系	考 試 時 間	2 月 23 日 (六) 第 三 節
---------	-------	-----	--------	---------	--------------------

なぜ人を殺してはいけないのか。あるいは、人を殺してもよい場合があるのか。
この問題について、歴史的・社会的・哲学的に意見を展開せよ。



備

註 試 題 隨 卷 繳 交

考試科目	日本語文化	所別	日本語文學系碩士班	考試時間	2 月 23 日(六) 第 14 節
------	-------	----	-----------	------	--------------------

次の一～三の問題から 2 題を選んで答えなさい。(毎題各佔 50%。可以中、日
文作答)

一、日本語の特徴を

- ① 発音 ② 語彙 ③ 文法 ④ 表記法
の観点から述べなさい。

二、次の歴史名詞を説明しなさい。

1. 摂関政治
2. 大隈重信
3. 尖閣諸島問題

(請注意：背面還有試題。)



備

註

試題隨卷繳交

考 試 科 目	日本語文化	所 別	日語文學系碩士班	考 試 時 間	2 月 23 日 (天) 第 四 節
---------	-------	-----	----------	---------	--------------------

三、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災と福島原発の核事故を受けて、すべての表現者が一瞬言葉を喪失してしまった。以下の (1) の引用文は鹿島田真希の芥川賞最新受賞作『冥土めぐり』(2012.9) の「受賞記念エッセイ 公的な不幸と私的な不幸」から抜粋した感想の言葉である。ここで取り上げられた「公的な不幸」という大文字の不幸について、なぜ創作者は言葉を失い、一種の「語り得なさ」を噛み締めてしまうのか、(2) の芥川龍之介「蜘蛛の糸」の引用文と対照させ、世界的市民総自己演出というポスト現代の時代に当たり、「災害と語り」の相関性の意味、キャラクターとしてしか捉えられない「他者像」と社会（年金、福祉、ニート、財政破綻や少子高齢化などの問題）との関係性、及び「他者」との連帯（憐れみと共感）について、その様々な困難さと時代的相違性について指摘分析してみよう。

【(1) 鹿島田真希「公的な不幸と私的な不幸」の言葉】

「冥土めぐり」を執筆するにあたっては、非常に苦勞して、何度も推敲した。どうしてこんなに苦勞したのだろう、自分はどういうことに苦勞したのだろう、と思い起こしてみると、やはり自分は簡単な言葉で、抽象的なことを表現するのに苦勞したのではないかと思ひ当たる。「冥土めぐり」では、ひとつの不幸ではなく、あらゆる不幸について言及したかった。それが抽象的であり、またそのことを簡単な言葉で表現することが難しかったのだと思う。

現代には色々な不幸の形がある。戦争や革命、震災のような公的なものから、いじめや失恋、貧乏のような私的なものまでいろいろだ。本作は、どのような不幸に直面している人にとっても、救いになるものにしたいと思って書いた。

公的な不幸と私的な不幸というものについて、私はしばしば考えさせられる。遠くの国でどんなに大きな戦争が起こっていても、自分の財布にあと千円入っていれば、と切実に思うのが人間というものだと思う。公的な不幸と私的な不幸が同じ比重を持っているのが、まさに現代という時代なのだと思う。

日本に震災が起きた時、私は語る言葉を持っていなかった。こんな時代にあんな大文字の不幸が起きてしまったら、私のような普通の人間には語る言葉がない。かつて、ある思想家が、原子爆弾の惨劇のことを「白い黙示録」と表現したが、これはうまく言い当てている。戦争や震災といった不幸の前に、普通の人間の言葉なら、負けてしまい、不幸は漂白されてしまうだろう。

人というのは、自分の心の中に起きている内面の葛藤を戦争と同じぐらいに脅威に感じているものだ。平和な国で育った現代人にとっては、一人の人間の狂気や悲劇が問題であり、関心事だろう。だから、震災のような公的な惨劇があった現在だからこそ、それをいじめのような私的な悲しみの言葉で表現することが、今は大切なことだと思っている。最大公約数の不幸について語りたかったら、最小の不幸を見つめ、繊細に描くべきだと私は思った。

本作は、そのような意味では、最小の些末な悲しみについて語ったものだが、それは世の中の様々な不幸にも相当すると思う。とてもありふれた話かもしれない。病の夫と一泊二日の旅行をして、主人公は心に小さな変化をもたらして帰ってくる。ただそれだけの、普通の物語だ。しかし多くの人が

備 註	試 題 隨 卷 繳 交
-----	-------------

考 試 科 目	日本語言文化	所 別	日本語文學碩士班	考 試 時 間	2月23日(天) 第 四 節
<p>平凡なりに、不幸や狂気を相対化して、たいしたことではない、などとは思えない。そう思えないことはけっして未熟なことではないと私は考える。きっと人というものは、どんな悟りの境地に至っても、自分自身のことが最大の関心事だ。(略) 戦争や震災が本当に、一人の人間の孤独や失恋と同じことだろうか。それは神しか知らないだろう。しかし多くの人間が、計り知れない不幸に出会った時に、自分の身近でもっとも過酷だった体験と照らし合わせて、このぐらい大変なことなのだろうか、と考える。実際同じことだとは限らないのかもしれないが、私はそうやって、<u>自分の不幸と、他者の不幸を比べて考えてみる人間の心理や意識</u>に興味がある。たとえその比較の仕方が正しくないにしても、人間というものは、他人の不幸に興味を持ち、自分の不幸に照らし合わせて憐れんだりして、本当に愛すべき存在だと思う。) (『文学界』2012.9、P212/213/217)</p> <p>【(2) 芥川龍之介「蜘蛛の糸」の引用文】</p> <p>〈この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多是両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。</p> <p>そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚きました。</p> <p>その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。</p> <p>後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。) (芥川龍之介「蜘蛛の糸」1918)</p>					
備 註	試 題 隨 卷 繳 交				